空間・社会・地理思想 第8号

論　文

泉谷 洋平 …… 2－22
人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論
―英語圏における理論的論争をめぐって―

森 義博 …… 23－43
地域通貨，求めること，満たすこと
―地域通貨は生き難さを緩めるすべとなりうるか―

篠原 雅武 …… 44－75
ゲオルグ・ジンメルの思想における社会的相互作用概念についての
理論的研究―都市空間論の観点から―

資　料

ヴォー・ゴク・ハン，木村 大輔，小林 善仁，
塔筋 岳史，藤井 暁，藤田 真人，水内 俊雄 …… 76－115
地図で復元する近代京都市の歴史社会地理

翻　訳

アンドリュー・レイション，デーヴィット・マットレス，
ジョージ・レヴィル（椋田 和美 訳） …… 116－130
音楽の場所

プン・ガイ，ウ・カミン（水内 俊雄 訳） …… 131－143
生きられた市民権と下層階級の中国人移民女性
―そうした人々の居場所のない世界都市―

空間・社会・地理思想 8号 2-22頁，2003年
Space, Society and Geographical Thought

人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論
―英語圏における理論的論争をめぐって―

泉谷 洋平*

Yohei IZUMITANI

Postmodernism and realism in human geography:
On the theoretical debates in the Anglophone journals

I 問題の所在

ここ 2，30 年の間に，英語圏では，それまで縁の薄かった周辺分野で空間的タームへの言及が増加してきたことによって，人文地理学とそれら周辺分野との接点がますます増えつつある。それにともなって人文地理学と他分野との境界が次第に不明瞭になるとともに，俗に言う地図の無い人文地理学の論文が目立つようになった。このような研究においては，ポストモダンという語が，その意義をどのように理解するか，それに対してどのような態度をとるかはともかく，一つのキーワードとなっていた。とりわけこの傾向が強まったのは，1980 年代の後半から 1990 年代の前半にかけての時期であったと思われる [1]。わけても「地図のない人文地理学の研究」の増加は，思想的，哲学的課題としてのポストモダンが人文地理学においても脚光を浴びるようになったことと関係していると思われるが，英語圏を中心とする近年の人文地理学のこのような理論的研究の動向は，「過激に惑う」（水内 1992），「多様をきわめ，分かりにくくなっている」（野澤 1995）などの表現に象徴されるように，日本の人文地理学では未だ十分に消化されているとは言い難い感がある。本稿の目的は，このような近年の英語圏における人文地理学の理論的研究の混迷状況を，少しでも理解可能なものとするための見取り図を提供することにある。

筆者がこのような作業の必要性を感じる理由は，現段階で英語圏の議論が日本にどのような形で導入されているか，ということと大きく関わっている。英語圏の議論を中心として人文地理学それ自体がますますグローバル化しつつあり，現状ではこの流れに容易にあらがえない以上，日本の人文地理学においてミッシングリンクとなっている海外の議論を整理する作業にはそれなりの価値がある。だが，英語圏の人文地理学でさえも，従来自明視されてきた系統地理学的な枠組みが，人文地理学の全体的動向を理解するための枠組みとして形骸化していることは明らかであるにもかかわらず（Dear 1988），英語圏の議論が日本に導入されていく場合，相変わらず「文化」「社会」「都市」「経済」「フェミニズム」などの冠が付され，一定のまとまりを与えられた下位分野として導入される傾向が続いている。筆者は，少なくとも 1980 年代以降の英語圏における人文地理学の大まかな動向を，こうした下位分野の見取り図のみから把握し，グローバルなレベルで英語圏の人文地理学の議論に対応していくことには限界があると考える。

この限界を前にして「過激に惑う」と表現するし

* フリー　y-iz@mars.sannet.ne.jp

かない日本の人文地理学の知的閉塞性を打開するためにも，筆者は，個々の「〇〇地理学」の動向を横断する議論の見取り図が必要であると痛感する。そして，そのような横断的議論のキーワードの一つが「ポストモダニズム」, 特に哲学的課題としてのそれである。ポストモダンという語が単に歴史的区分上の一時期や，現代の都市景観の特徴などを指し示すキーワードとしてだけでなく，哲学的，思想的問題としても受け止められるようになるにつれて，英語圏の人文地理学さえもが自らの位置付けを見失いかけていたことは後に確認するが，そのような混乱を経て，英語圏の人文地理学がかつてのポストモダンをめぐる議論からいかなる意義を見出したのか，あるいは見出しつつあるのかを，本稿で確認していきたい。

ところで，日本において，近年の英語圏における人文地理学の研究動向をポストモダン人文地理学の名のもとに整理した最近の研究として, 加藤 (1999) がある。そこでは，1980 年代後半から 1990 年代の初めにかけて人文地理学でポストモダンの議論に先鞭をつけた代表的論客であるハーヴェイ Harvey, D.，ソジャ Soja, E.，ドイチェ Deutsche, R.，マッセイ Massey, D.らの中に，「対象としてのポストモダン／態度としてのポストモダン」という対立軸 [2] を見出しうることが指摘されている。そして，この軸により区別された後者の立場の登場が，フェミニスト地理学を中心として，さまざまな社会理論が導入されていったことと並行していたことも指摘されている。つまり，加藤（1999）は，「対象としてのポストモダン／態度としてのポストモダン」という区別を，「地理学に固有の『知』／フェミニスト地理学を中心とする批判理論」という区別とも重ねて見ている。

しかし，このような区別は，「都市へのまなざし」というテーマに関しては有効であるとしても，加藤が表題に掲げるポストモダン人文地理学の適切な見取り図を提示するものではない。われわれの目に近年の英語圏におけるポストモダニズムの議論が「過激に惑う」（水内 1992）ように映るのは，加藤や大城が示したこれらの区別が日本の人文地理学において十分に理解されていなかったからではない。むしろそれらがわれわれ日本の人文地理学者に少々眩暈にも似た当惑感を与えるのは，大城や加藤がレビューした諸テクストが著されていた 1980 年代後半から 1990 年代初めの時期において，すでに英語圏において「対象としてのポストモダン／態度としてのポストモダン」という区別自体が有効でなくなっていたからだ。

そこで本稿では, 1990 年代前半に英語圏の人文地理学で生じた二つの論争の集中的検討を通じて，この混沌をより適切に整理しうる見取り図を提示したい。この作業を通じて，近年の理論的研究を理解可能なものとする際に必要となるのが，大城や加藤らが用いた区別とは別の区別であることが明らかになるだろう。その区別とは，「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」という区別である [3]。批判的実在論それ自体は特に 1990 年代に入って人文地理学に登場した新しい哲学的潮流ではない (Sayer 1984, 1992)。しかし，特に本稿でこれから紹介する懐疑論的ポストモダニストとの論争に関与することによって，従前の人文地理学における科学や言語に対するナイーブな認識への徹底的な反省を促すとともに，その後の理論的研究の方向性に新たな選択肢を与えるきっかけとなった。

以下では，まず，それぞれ論争に関与した当事者の見解や，論争における相互のやりとりを詳細に検討する。次に，二つの論争をメタレベルから眺めることで「対象としてのポストモダン／態度としてのポストモダン」と「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」という二つの区別の関係について論じるとともに，論争に関与した論者たちの 1990 年代後半以降の研究からこれらの論争の位置付けを顧みる。以上のような作業によって一定の見取り図を得た上で，最後にこのような英語圏の理論的研究動向に対する日本の人文地理学者としての筆者なりの見解を寄せつつ，本稿を締めくくることにしたい。

II　ポストモダニズム論争前夜—*AAAG* 誌上の論争を中心に

(1) カリーのプレッド批判

まず, 1991 年から 1992 年にかけて *Annals of the Association of American Geographers*（以下

AAAG）誌上で起こった論争の顛末を紹介しておきたい。この論争は，カリー Curry, M.の論文に対するプレッド Pred, A.，ハンナとストロメイヤー Hannah, M. & Strohmayer, U.のコメントと，それに対するカリーの応答という形で進行した（Curry 1991; 1992, Pred 1992, Hannah and Strohmayer 1992）。ここでは論争の発端となったカリーの議論を検討する。

カリーによれば，1980 年代後半の人文地理学では，「ポストモダニズム」が急速に議論の焦点となっていった。その中には，ディアーのように明白に「ポストモダニズム」を標榜する論者から，オルション Olsson, G.，ライヒェルト Reichert, D.，プレッドのような共感的論者，ハーヴェイのような批判的論者に至るまで，様々な立場の論者が存在していた。しかし，「ポストモダニズムの考え方はなぜかくも長く遅れて［人文地理学に］やってきたのか」。また，「それら［人文地理学者のポストモダニズム］は本当にモダニズムの伝統的慣習を越えるものなのだろうか」（Curry 1991: 211）[4]。

カリーは，当時の人文地理学者のポストモダニズムが本質的にはモダニズムと変わらないものであり，ニーチェやウィトゲンシュタイン，ローティらが参照されているにもかかわらず，彼らの思想が持っていたはずの批判精神が失われていることを批判する。しかも，彼はその問題を，ディアーやプレッドら人文地理学者の個人的資質の問題として捉えるのでなく，人文地理学という知的実践にモダニズムの伝統が根強く染みついてしまっていることと結びつけて考えている。つまり，人文地理学のポストモダニズムにおける「モダニズムの傾向 strains of modernism」は，特定の個人に限られる問題ではなく，われわれが「人文地理学」と呼ぶ種類の社会的実践に根深く埋め込まれている構造的問題なのである。ここでは後に直接論争へと発展したプレッドへの批判を中心に，詳しく検討してみよう[5]。

プレッドは 1980 年代に入ってから，箇条書きのようなスタイルや，詩的な形式の文章を多用するなど，奇妙なスタイルのテクストを生産しつづけていた[6]。例えば，

The history of lost wor(l)ds
as the story of transformations
in institutionally embedded
practices and power relations
as the story of changes in consciousness—
refract(ur)ed reverberations of Vico's voice
invoked as closing pretext （Curry 1991: 218 による Pred 1988 の引用）[7]

プレッドはこのような独特の詩的書法を用いることによって，言語の持つ曖昧さや両義性を強調していた[8]。だが，このような書法は，「言語の曖昧さ」を語る上で本当に必要不可欠だったのであろうか。一行目の wor(l)ds という綴りに明白に表れているように，プレッドは，言葉（表象するもの）と世界（表象されるもの）を融合させて語ろうとしている。プレッドは，このように詩的な書法を用いることによって，そこに言語の曖昧さを反映させようとしているのである。このように，言葉はそれが表象しようとする世界を確実に反映するという認識は，表象する言葉と表象される世界とを対応させるようなコードを前提にしている。そして，このような書法をプレッドが意図的に採用したということは，プレッドがそのようなコードを，曖昧さのかけらもなく見通すことの出来る超越的立場にいたことを含意している[9]。

言語の持つ曖昧さ，言語が使用者のコントロールを越えるものであるということ，この点の認識が，ポストモダニズム思想の一つの批判的意義である。ただし，このことが批判的な意味を持つのは，それを指摘する発話者の言語に対する自明視された超越性さえも相対化されてしまう限りにおいてである。しかしながら，プレッドは最終的な局面で，言葉と世界を結びつけるコードを超越する立場を自明視してしまっている。そうであれば，彼のテクストは批判的な意味を持たない。では，プレッドが常識的な文体をあえて崩して詩的スタイルを採用したことは，どのような意味を持つことになるのか。カリーは，ディアーが多極分散化した人文地理学の現状をポストモダンと捉え，多極化した様々な立場の間での対話を重視していることを受けつつ，次のように指摘している。

対話への呼びかけが，多くのポストモダニズムにおける二つの互いに関係する特徴を露骨に示している…。第一に，書かれた言葉への不信である。書かれた言葉は現実

を実際には捉ええない。第二に，おそらくもっとも根本的なのは，親密性へいたる手段としての対話への信念である。そしてこれはそれ自体根本的に観念的なものである。書かれた物の多くが把握困難な場合，その困難さは部分的に著者によって意図されたものである。その困難さは人を排除するものでも受容するものでもある。それは，不快に思うものや無関心な者を遠ざけ，何か重要なことが語られていると信じる者を受け入れる[10]。

つまり，ポストモダニズムの論者は，書かれた言葉の不透明性，いわゆる「表象の危機」の問題を指摘し，だからこそ，反面ではディアーのように対話の必要性を力説しようとする。しかし，実態としては，その対話のサークルに加わることが出来るのは，例えばプレッドが文字通り主張する内容だけでなく，彼の用いた書法にも重要な意味が隠されていると考える者だけである。そして，カリーの指摘するように，プレッドのテクストに書かれているのは「筋が通っていて容易な」ことだけであり，ことさら詩的書法に頼らざるを得ない内容でも，対話の必要性を強調すべきテーマでもない。したがってプレッドが過激で深遠そうなスタイルを採用しているのは，カリーにしてみれば，「研究の報告」のためではなく「著者の宣伝」（以上，Curry 1991: 220）のためにすぎない，ということになる。

そして，このようなテクストに「何か重要なことが語られていると信じる者」によってテクストの著者を中心とする幻想の「共同体，親密性，そして帝国」が構築される[11]。このようなプレッドのテクスト戦略には世界や言語を解釈する「著者の現前」，「知者としてのオーラ」[12]がありありと見て取れる。カリーによれば，このような研究実践のあり方自体は，ポストモダンを論じる人文地理学においても，かつての計量地理学のそれと比べて何ら変わるものではない。計量革命においては若手のグループが，数学的言語へのアピールを通じて権威付けを図っていたが，当時の英語圏のポストモダン人文地理学においては，権威付けの材料が「カントやエーコやデリダへの参照」（Curry 1991: 223）[13]に変わったに過ぎない。このような科学的実践のあり方自体はモダニズムのそれであって，そういった意味で「人文地理学者のポストモダニズムは本質においてモダニズムなのである」（Curry 1991: 210）。

(2) 反応と応答 ― プレッドとハンナ・ストロメイヤー ―

このようなカリーの批判に対するプレッドの応答は非常に感情的なものであった。しかし，それによって，かえってプレッドのテクストや研究実践に対する姿勢に，カリーが批判する問題―モダニズムの残滓―が存在していたことが明らかとなる（Curry 1992）。

プレッドの反論の要点は，カリーはプレッドをポストモダニストと呼ぶが自分はそもそもポストモダニストなどではないということ，また自分はカリーが批判するように言語と世界とを別箇の領域としては捉えておらず，両者が切り離せないことを十分認識しているということ，プレッド自身がどのような意図を持ってテクストを著したのかをカリーが知るすべもなく，にもかかわらず自分のテクスト戦略を「意図的な目くらまし」と主張するカリーの態度は研究者として不適切であるということ，などである（Pred 1992）。

プレッドのテクスト戦略を「意図的な」ものと断定したカリーの主張は確かに乱暴ではあった。ところが，プレッドが，このようなカリーの読解を不正確でいい加減な誤読であると断言しそれに対して怒りを隠さないところに，カリーの主張の正しさが逆説的にも表れている（Curry 1992: 310）。つまり，プレッドは，「読者が私のテクストからいかなる明確な意味を引き出すのかについて支配し制御する権威を，著者である私は欠いている」（Pred 1992: xv）と述べているにもかかわらず，暗黙の内に「自分のテクストがこのように読まれるべきである」といった，テクストに対する著者の超越性，特権性を自明視していたのである。プレッドの怒りは，その自明視していた期待が裏切られたことから発しているのであり，このことが「著者の現前」，「知者のオーラ」といったモダニズムの伝統に対して，プレッドがいかに無批判であったかを露わにしてしまっている[14]。カリーのプレッドに対する再反論は，このようなプレッドの盲点を的確に衝いたものであったといえる。

ところで，プレッドとともにカリーのテクストに対してコメントを寄せたハンナとストロメイヤーは，プレッドと全く逆に，カリーに対して非常に共感的であった。

今なお素人臭い人文地理学内部のポストモダニズムの議論に対するタイムリーで重要な貢献であるカリーの論考…は，長らく待ち望まれていた真剣さの感覚をもたらしてくれた。（広い意味で）「ポストモダニズム」に関わっている地理学者は相変わらずモダニストの前提に依存しているという，彼の主要な論証は完全に成功している（Hannah and Strohmayer 1992: 308）。

このように冒頭からカリーの論考を非常に高く評価していることから，ハンナとストロメイヤーもカリー同様，それまで人文地理学において論じられていたポストモダニズムに対して何らかの不満を持っていたことが窺える。ハンナとストロメイヤーはカリーのプレッド批判に対する見解を直接表明してはいないが，ここに紹介したコメントから，カリーによるプレッド批判の正当性をハンナとストロメイヤーは黙して肯定していたことが察して取れるだろう。

しかし他方で，ハンナとストロメイヤーは，カリーの議論が「表象の危機」の問題を単に「方法の問題」と見なしている[15]ゆえに未だラディカルさを欠いている点，相対主義の問題を単に知の局所化の問題へと還元しており，個人や主体の概念が問われていない点などを批判する。その上でハンナとストロメイヤーは，「表象の危機」の問題は方法論や哲学的アプローチの領域を超えてあらゆる局面で問題になること，知を支える基盤の喪失としての相対主義は個人や主体の一貫性やアイデンティティをも内破すること，したがって相対主義の問題は単に知識の共有範囲がローカルになるという以上の意味を持つことを主張する。

ハンナとストロメイヤーがカリーのプレッド批判を中心としたポストモダン人文地理学批判を基本的に支持する一方で，「表象の危機」の問題に対する認識が甘いと批判する背景には，特にデリダの思想の強い影響を見て取ることができる。これに対して，カリーの議論に大きな影響を与えていたのは主にウィトゲンシュタインであった。1980 年代後半から 1990 年代初めにかけての人文地理学におけるポストモダニズムをめぐる議論への反発は，カリー，ハンナとストロメイヤーもともに共有するところであるが，両者の反発の仕方は，彼らの背景にある哲学の違いによって微妙に異なっていた。

このような，「表象の危機」の問題をもっとラディカルに考察すべきというハンナとストロメイヤーのコメントに対して，カリーは，「ハンナとストロメイヤーの懐疑主義的な関心とは無関係に，言語は，多かれ少なかれ，極めて有効に機能するものである」とささやかに反論している。*AAAG* 誌上における両者の対立は，少なくともプレッドの場合ほど際立ってはいない。しかし，同年 *Antipode* 誌上でストロメイヤーとハンナが展開していた論考を参照すれば，実はこの両者の間にも批判のスタンスに違いがあることが分かる。そこで次に，ストロメイヤーとハンナの見解を検討してみたい。

(3) ストロメイヤーとハンナのポストモダニズム批判

ここで紹介するストロメイヤーとハンナの議論は先に紹介したカリーへのコメントと同年に *Antipode* 誌上に発表されたものである。ここでは，先に紹介したカリーへのコメントにも現れている彼らのスタンスが，より直截に表明されている。以下，かいつまんで論旨を紹介していくことにしたい。

1980 年代の後半にディアーやソジャ，ハーヴェイら人文地理学者たちが論じていたポストモダンと，ウィトゲンシュタインやデリダ，フーコーらの思想家に象徴される言語論的問題としてのポストモダン，この両者の間には，ある種のギャップがあるが，人文地理学者はそのギャップを疑問視せず沈黙を保っていた。そして，ストロメイヤーとハンナは，この沈黙が学問分野の壁を維持しようとする無意識の欲望とそこから要請されてくるある種のテクスト戦略やレトリックと結びついている主張する。ここにおいて，ポストモダニズムが提起した厄介な問題は半ば必然的に黙殺されるのである。

ポストモダニズムは，例えばこの雑誌［*Antipode*］にも見受けられるように，形式的な深遠への到達，…あらゆる種類の批判的社会理論への根本的な問いとして理解されてきたが，にもかかわらず，この問いは，…，さらなる解釈によって乗り越えることができる。私たちはこのことに疑いを持っている。そして逆に，私たちが読み解く［従来の批判的社会理論とポストモダニズムとの対峙に関する］沈黙は，見落としなどではなく，学問分野の正当性を守る上で重要な戦略上の盲点から生じていることを示す（Strohamayer and Hannah 1992: 29）。

ストロメイヤーとハンナは，ソシュールや前期ウィトゲンシュタインを参照しつつ，言葉と世界との結びつきを最終的に保証するものは何もないということを，すなわち「表象の危機」が不可避であることを主張する。つまり，ソシュールやウィトゲンシュタイン，あるいは彼らの思想の継承者たちは，「第一に，人間の理解にとっての限界と可能性の最も重要な決定因は，それを通じて人間の理解が媒介されざるを得ない言語構造の複雑性であり，第二に，媒介の不可避性は，直接性，真理，確実性，それとしてあるような現実などといった概念を問題あるものとしてしまう」（ibid: 37）という考えを共有している。

これに対し，「社会科学においては（地理学の場合は例外なく），唯物論者たちがポストモダニズムへ反論するという重荷を引き受けてきた」（ibid: 38.）。そのような試みの第一の形態は，ほとんどの唯物論者に見られるように，「哲学的レベルでの言語に関する議論に関与せずに無視する」（ibid）というものであり，そこでは「真理など存在しない」というスキャンダラスな言葉が一人歩きして槍玉に挙げられ，そのような発想に至ったウィトゲンシュタインやソシュール，デリダらの哲学的実践が省みられないまま，考慮するに値しないものとみなされる傾向がある。第二の形態は，ポストモダニズムの言語論の源流に位置する論者を正面から批判しながら，最終的にはポストモダンの言語論が提示するパラドクスを情報社会化，消費社会化などという「歴史的コンテクスト」に埋め込むことで，やはり言語に関する哲学的問いを回避してしまうというものである（ibid: 42）[16]。第三の形態は，第一，第二のタイプのようなポストモダニズム批判に対してよりラディカルな立場を取る。そこでは，唯物論の立場をより厳格に維持した結果として，「歴史的コンテクスト」それ自体さえも言語の外にある確実性などではなく観念に過ぎないとされる。こうして，唯物論の立場からのポストモダン批判は，その最もラディカルな形において，逆説的にも「表象の危機」が不可避であるという帰結に至ってしまう[17]。

このように三つのタイプを検討する作業が，それ自体ですでに，人文地理学者のポストモダニズム理解に対するラディカルな批判になっている。というのは，人文地理学者の多くがポストモダニズムを前にして第一もしくは第二のタイプに近い戦略を踏襲することで，ソシュール，ウィトゲンシュタイン，アドルノが不可避であるとした難渋な問題を回避していたからである。冒頭でストロメイヤーとハンナが「戦略上の盲点」と表現したのはこのことである。

ストロメイヤーとハンナはそのような人文地理学者のテクスト戦略を，排除 exclusion と同化 assimilation という二つのタイプに分けているが，前者は先述の捨象の戦略とほぼ同じである。後者の場合，「少なくとも相対主義の問題の深刻さを認める。が…その後にもなお批判的社会科学の再構築を目指そうとする」（ibid: 51）[18]。1980 年代後半にポストモダニズムについて論じた人文地理学者は，ディアーのような支持者にせよハーヴェイのような批判者にせよ，おおよそいずれかの戦略を採用することで哲学的難題を回避していた。それぞれの戦略は同一の論者のテクストにも混在しており，したがってこの区分は解釈のための便宜にすぎない。究極的にはどちらの戦略も，哲学的問いとしての「表象の危機」の問題を捨象するものである点に変わりはない[19]。ストロメイヤーとハンナが警戒するのは，人文地理学にとって有効な範囲内でポストモダニズムの議論を都合よく取り込みながら，「そのような発見が地理学の発展に何らかの貢献をなしうる可能性を問題視する」（ibid: 52）というきわめてポストモダニズム的な姿勢は拒否するという態度，つまり，人文地理学それ自体の限界が問われない程度に「ポストモダニズムを飼い慣らす」ことで人文地理学者，社会科学者のアイデンティティを堅持しようという態度である。彼らはむしろ，人文地理学のアイデンティティが解体されるまで徹底的に，「表象の危機」を人文地理学の実践にとって不可避な問題として受け止めるべきと主張するのである。

> それぞれのアプローチ［排除と同化］は，本当に「ポストモダンの挑戦」への取り組みになっているのだろうか。私たちはそうは思わない。これらの戦略の駆使も理解できなくはないが，…，知的誠実さにしたがってリスクに身をさらすことが求められていると私たちには思えるのだ（ibid）[20]。

以上のようなストロメイヤーとハンナによる批判の背景には，カリーのそれとは異なって，構造主義

からポスト構造主義へと至る哲学的潮流の中で問題にされるポストモダニズム[21]は特権的な問題であるという認識がある。ただし，彼らの議論は，人文地理学におけるポストモダンの議論に対する異議申し立てという本来の意図を考慮すれば，ややまとまりのない印象を与える部分も少なくない。特にソシュールやジェイムソン，アドルノの読解は，人文地理学者による「排除」と「同化」の戦略を批判する伏線とはいえ，明らかに冗長である。しかし筆者は，この冗長さの中にこそ，当時の人文地理学者によるポストモダニズムの議論の哲学的浅薄さに対する彼らの反感が込められていると考える。彼らが，背景こそ違うもののカリーの姿勢を基本的に支持していたことも，このような文脈から理解されるべきであろう。

だが，彼らの議論は良くも悪くも極めてラディカルであったため，翌年別の論者―バーネット Barnett, C.とセイヤー Sayer, A.―からの批判を浴び，それが新たな論争へ発展することになった。次章では，この後続の論争におけるバーネットとセイヤーそれぞれの議論，次いで三者間のやり取りを整理する。特にセイヤーが批判的実在論の立場から展開する議論は，*AAAG* 誌上での論争ではカリーに対するプレッドの激しい反発の陰でさほど目立たなかった，ハンナとストロメイヤーに対するカリーの反論が持つ意義を理解する上で重要である。つまり，*AAAG* 誌上の論争は，次に紹介する論争の中で新たな意味を与えられるのである。

III *Antipode* 誌上の論争―ポストモダニズムと批判的実在論

(1) バーネットのハンナとストロメイヤー批判

ストロメイヤーとハンナは，先に紹介した議論の含意をより一般的，日常的な文脈における広義の「政治」の問題として語っている。バーネットの批判が集中したのはこの部分であるが，まずは，その批判の槍玉に上がったストロメイヤーとハンナの議論を簡単に紹介しよう。

> われわれは，批判的社会科学者として，われわれの政治的行動を合理化し，あいまいに見えなくするよう仕向けられている。だが，行動自体は気が滅入るくらいにそのような努力とは無関係なのだ。政治的行動は基礎付けが不可能であるが，そのことにかかわらず継続されていく（ibid: 48）。

何らかの実践を正当化すると考えられている理念も，「表象の危機」の含異を考慮に入れると，「ファシズムのようなもっと大げさな事例と大差ない。なぜなら，それらは正当化の様式において全くあいまいなのだから」（ibid: 48-49）。したがって，「ポストモダンの政治的行為者はラディカルな責任，理論的なスケープゴートを志向しないような責任を引き受けねばならないだろう」（ibid: 49）。ストロメイヤーとハンナはこのような論法を「脱構築的」と名指している[22]。「脱構築はテクスト外部に対する確たる参照の可能性をラディカルに拒むものである」。「いまや有名となったジャック・デリダの文言『テクストの外には何も無い』は，まさにこのことを強烈に煮詰めた言葉である」（ibid: 36）。

このような主張に対し，バーネットは，より精緻なデリダ読解に基づいて厳しい反論を寄せている。バーネットによれば「デリダ自身は，脱構築は参照という言葉の常套的な捉え方に疑問を投げかけはするが，参照という考え方をまるっきり放棄するわけではない，と示唆している」（Barnett 1993a: 348）。脱構築は単なる「表象や参照の否定」ではない。そもそも参照や表象は，「それが可能となる条件に盲目である時，初めて確実な効果を発揮する」（ibid）。脱構築とは，その可能性の条件を暴露する作業のことであり，それは言語がリアリティを表象する可能性を否定するものではない。厳密には，「言語とリアリティとは分離された領域ではなく」「リアリティが言語の中にある」（ibid: 350）ということを明らかにすることで，言語の「機能に対する理解を複雑なものにする」営みが脱構築なのである（ibid: 349）。これに対してストロメイヤーとハンナが「脱構築」と言う時，そこでは言語とリアリティが別個の領域であるかのように論じられ，その上で前者が後者を確実に反映する可能性が否定されてしまっている。

そして，このような「脱構築＝反表象」の立場が，本節冒頭で紹介したように，あまりに性急に政治的なレベルの話に直結していることに対して，バーネットは警鐘を鳴らしている。バーネットは，デリダ

に依拠しつつ，表象の問題が単なる反表象の立場表明によって乗り越えられるほど安易な問題ではないことを指摘し，単に「表象の不確実性」を声高に叫ぶだけで満足するようタイプの「表象批判」を非難する。「表象の不確実性」，表象の機能の複雑性を「表象の不可能性」へとすり替えることで「表象すること」それ自体へのネガティブ・キャンペーンを展開し，言語において表象とリアリティが不可分に結びついているという複雑な局面をほとんど省みないストロメイヤーとハンナは，旧来のポストモダンに関する議論を論敵として祭り上げるとともに「表象即悪也」“representation is bad”（ibid: 353）的ポストモダン学派をせっせと作り上げている，と。

さらにハンナとストロメイヤーが

> あらゆる解釈の営為に先立って，われわれの感性はわれわれを懐疑や攻撃，反抗へと駆り立てる。われわれが責任を持つべきなのは，このような徹底されたレベルでの経験に対してであり，それを表現する様式の厳格さ［科学的理論による実践の正当化］に対してではない（Strohmayer and Hannah 1992: 53）。

と言う時，彼らはまるで表象の媒介無しに，実践に対する責任を直接把握することができるかのような立場に転じてしまっている。しかし，リアリティと言語が分離出来ず，前者は後者の中にある以上，あらゆる現実的な実践は言語による表象に媒介されざるを得ない。ストロメイヤーとハンナの議論は見事にこの点を見落としており，そのために昨今の政治で実際生じている現実への態度をうやむやにしてしまう[23]。これが最も顕著になるのは，彼らがファシズムについて言及するときである。彼らは，表象によるあらゆる正当化の営みが「ファシズムと同じである」と言い捨てて，居心地のいい認識論的懐疑主義へと逃げ込む。しかし「今日のヨーロッパにおけるその［ファシズムの］声高な主張を考慮すれば，われわれが何をファシズムと呼ぼうとし，何を呼ぼうとしないのかについて，もう少し分別をつけたいものである」（Barnett 1993a: 355）。すべてがファシズムと同じだと言い捨てることではなく，いかなる正当化の様式がファシズムであって，いかなる様式が許容可能な闘争の正当化なのかを識別する技量を磨かねばならない，というわけである。

以上のように，バーネットの批判は，ストロメイヤーとハンナの脱構築に対する理解の甘さの批判に始まり，さらには彼らが認識論，思考実験のレベルで導き出した「表象の危機」の問題を安易に実践的レベルの問題として論じていることの危うさに向けられている。同じような批判を，ポストモダニズムの論者に対して全く別の哲学的背景からぶつけたのが次に紹介するセイヤーである。

(2) セイヤーのポストモダニズム批判

> ここ数年，ポスト構造主義やポストモダンの考え方が，哲学にかなりかぶれた地理学のテクストにおいて人気を博している…。それらの考え方の源泉は多岐にわたるが，私は手短にそれらをポストモダニストと十把一絡げにしておく。ポストモダニスト的考え方の関心ごとの中心をなす特徴は，以下の通りである。言説と言語への並々ならぬ関心。真偽の概念や経験的検証に対する懐疑。哲学的なシステムの概念やマルクス主義などのメタ言説をまゆつば物とみなすこと。知識の漸進的発展が解放の役割を担うという考えへの不信感。そして，差異に寛容で「ローカルな知」（リオタール）を持ち上げること（Sayer 1993a: 320）。

批判的実在論者を自認するセイヤーの揶揄とも挑発とも取れるこの文章は，直接的にハンナ・ストロメイヤーやバーネットらに向けられていたものではない。というのは，ここでセイヤーが，ハーヴェイ，ソジャ，ディアー，ドイチェ，ハンナ・ストロメイヤー…らを，意識的にポストモダニズムと「十把一絡げ」にしているからである（ibid）。つまり，論争の当事者であるハンナ・ストロメイヤーやバーネットらの個別の議論はひとまず括弧に入れた上で，ポストモダニズムをめぐる議論の中に見られる一般的な傾向性を批判的実在論の立場から批判することが，セイヤーの狙いであった。

セイヤーはポストモダンの議論の問題点を相互に関連する三つの側面から指摘する[24]。一つ目は，知を支える究極的な土台を発見し絶対的真理を確立できるという信念―基礎付け主義―の批判から転じて，物自体はわれわれに発見されるべく存在するのでなく，社会的,言説的にのみ構成されるといったような極端な観念論へ至る倒錯である（ibid: 321-332）[25]。第二は，グランド・セオリー―何らかの概念を中心

に据えそこからあらゆる事象を説明しようと試みる全体論―の否定から，ばらばらに分節化された共訳不可能なローカルな知という考え方への飛躍である（ibid: 332-336）。第三は，真理に対する言明やそれらの経験的な検討の可能性の否定から，あらゆる価値観が同等に正当であるとする極端な文化相対主義への傾倒である（ibid: 336-339）。批判的実在論においては，これらの倒錯は回避可能であるとセイヤーは主張する。

批判的実在論の場合，経験的実在論，素朴実在論と異なり，言語が使用者のコントロールの範囲を越える点が認められている。つまり，透明なメディアとしての言語によって，世界をそれとしてくまなく把握することの不可能性を承認する。いわば，ストロメイヤーとハンナとが強調していた，表象の不確実性を承認しているという点で，ポストモダニズムと共通点を有するのである。だが，この認識から，「言語の外部は存在しない」こと，すなわち「表象の不可能性」が必然的に導かれる保証はないと考えるところに，批判的実在論の特徴がある。批判的実在論は，言語が使用者の意図やコントロールを超えてしまうこと，常にそれが世界を表象することに失敗する可能性があることから，人間の認識や言語を超越する外部の世界としか言いようがない「何ものか」が実在すると考える立場なのである。そこでは，世界をくまなく説明する「大きな物語」や「グランド・セオリー」，あるいは「意味を伝達する透明なメディアとしての言語」という考え方などは確かに否定されるが，知識の妥当性を評価し，われわれの社会を相対的にあるべき方向へと変えていく可能性は否定されずに担保される[26]。

こういった立場から，言語が使用者のコントロールを越えることを認めた途端に表象の不可能性へと反転するポストモダニストをセイヤーは批判する。ポストモダニストは表象の危機やコミュニケーションの不可能性などを強調するにもかかわらず，

「意味の決定不能性」に関する研究会をXという場所でYの日時に開催しますという招待状が届けば，ポストモダニストはその案内状の意味が決定不能だとは考えずに，その意味を間主観的に正当化可能で安定したものと見なし，（会議場や似た者同士が集まることなど）何らかの現実を首尾よく参照するものと見なしている（ibid: 327）。

ところで，この一文を先に紹介したカリーのハンナとストロメイヤーへの反論と比較すれば，カリーの立場が，セイヤーほどあからさまではないにしても，批判的実在論に近い立場であることがわかる。カリーもまた，表象が不確実であるというハンナとストロメイヤーの懸念をよそに，現実問題として表象は相対的に首尾よく機能していると指摘していた。カリーは，後期ウィトゲンシュタインが「言語ゲーム」や「生活の形式」という言葉を導入した背景の一つには，懐疑主義の徹底をせき止め，言語の外部の世界を復権させる意味があったと指摘している（Curry 1989）。カリーの立場が批判的実在論に近い立場になるのは，このような後期ウィトゲンシュタインの哲学をカリーが評価していたことの影響である。カリーとセイヤー両者のハンナ・ストロメイヤーに対する批判は，結果として「認識論的に導き出した懐疑論を実践のレベルに当てはめることに対する異議申し立て」という意味において重なることになったと言える。

こうして，認識論的な懐疑から出発して表象の確実性を保証するものは無いという点を強調する懐疑論的ポストモダニズムと，表象の不確実性やグランド・セオリーの不可能性を承認しつつも認識論によって到達できない実践のレベルを想定し，ここに知の妥当性を保証する場を確保しようとする批判的実在論との対立，という構図が浮かび上がってくる。しかし，この「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」の対立がより重要で決定的な理論的課題であることを印象づけたのは，単に後者に近い立場から前者への反論が現れたからではなく，両者の間でダイナミックな論争が展開されたからである。このことを確認するために，次節では，*Antipode* 誌上での論争における三人の論者間のやり取りと，その後の彼らによる論争の回顧を振り返ってみることにしたい。

(3) 三者間における論争の展開

まず，ハンナとストロメイヤーのバーネットとセイヤーに対する反応から検討していきたい。ハンナとストロメイヤーは，自分たちが「哲学的課題」として重視したポストモダニズムや表象の問題に対し，バーネットが精緻なデリダ読解に基づいて哲学的に

正面から批判を寄せたことについて，「われわれはバーネットのデリダ読解の明らかな幅の広さに勇気づけられた。これは論争が然るべき方向へと向かっていることの兆しである」（Hannah and Strohmayer 1993: 359）と歓迎の意を表している。

しかし同時に，言語とリアリティを分離された領域であるかのように扱っているというバーネットの批判は的を射ていないと反論する。言語とリアリティは，確かにバーネットの言うように，別個の領域ではない。しかし，これまたバーネットが指摘したように，リアリティが常に言語による表象に媒介されざるをえないのであれば，ストロメイヤーとハンナが言語の問題を哲学的に論じていく実践もまた，表象を媒介されざるを得ない。してみれば，この実践のプロセスにおいては，言語とリアリティを別の言葉によって表象せざるを得ない。つまり，いかに理念的にはバーネットの言うようにリアリティが言語と切り離せないものであっても，ストロメイヤーとハンナが実際に論を進める上で，両者を別の言葉によって，別の領域に属するものであるかのように表現することは，ある意味で不可避である。バーネットの批判は，このようなストロメイヤーとハンナの議論の実践的側面を見落としており，言語とリアリティを分けて表現している部分だけを表面的にあげつらっているに過ぎない（ibid: 359-360）。

しかし，表象の不確実性を「不可能性」へとすり替えている点や，認識論的懐疑主義が現実の問題を直視しないロマン主義へと傾倒しかねない点に対しては，バーネットの指摘するとおり，ストロメイヤーとハンナの議論が舌足らずだったことは否めない。実際に彼らも前者に関しては，バーネットの指摘を受け止めつつ，やや歯切れの悪い弁解をするにとどまっており（ibid: 360-361），後者の問題点についてはバーネットの批判の正当性をほぼ全面的に承認している（ibid: 362）。

また，ロマン主義や観念論への傾倒という点に関してハンナとストロメイヤーは，「これらおよび関連する問題は，リアリストの思考とのよりしっかりした意見交換を通じて，さらに実りある形で追求していくことが可能であった」（ibid）として，セイヤーの議論の意義も評価している。しかし，ハンナとストロメイヤーは自分たちのように「表象の危機」を真剣な問題として受け止めることが，セイヤーのいうように，人間の思想や行為を制約する外的リアリティの全面否定につながるというのは誤解であるとも述べている（ibid）。なぜならば，ストロメイヤーとハンナは単に言語が外的リアリティを表象する際の確実性に根拠がないことのみを問題にしているのであって，外的リアリティが存在しないことを問題にしていたわけではないからである。そして，奇しくもセイヤーがポストモダニズムとリアリズムには共通性があると述べたとおり，言語が外的リアリティを表象する際の確実性に根拠がないという事態そのものは，セイヤーにせよバスカーにせよ批判的実在論者も承認するところなのである。

さらに，セイヤーが実践レベルにおける「相対的な表象の確実性」を批判的実在論の正当化の根拠にしようとしている傾向を，ハンナとストロメイヤーは，次のように批判する。

> 確かに私たちは「（研究会への）招待状の意味を…間主観的に正当化可能で安定的なものと見なし，何らかの現実を首尾よく参照するものと見なしている」が，にもかかわらず，われわれにそのような行動を要請するものが即ちわれわれのそのような行動を保証するものでもある，と決めつけることはできない。なるほど，確かに「われわれは，表象上の言説の機能と実際上の言説の機能との間にある種の線引きをせずには何ごともなしえない」と言えるだろう。しかし，例えば「湾岸戦争で誰も死にませんでした」という言明と「湾岸戦争でたくさんの人が死にました」という言明の間の線引きをわれわれに強いるものを，正当化の原則と取り違えることは，そのことと全く別問題である（ibid）[27]。

それ自体として存立しているリアリティを認めることは，あらゆる人間の行為や思考の不可避な前提条件であることはハンナとストロメイヤーも認めるところであるし（ibid），実際に，元の論考でも彼らはこの点を否定していたわけではない。しかし，セイヤーが言うように実践やリアリティによって思想や行動の正当化が可能であるということは，言語を超越する実践やリアリティの水準の存在を認めることから必然的には導かれない。ここにおいてハンナ・ストロメイヤーとセイヤーの立場は際立って対照的となる。前者は「表象の危機の問題がいかに不可避であるか」という問いに，後者は「科学的実践の妥

当性がいかに正当化しうるか」という問いにあくまでこだわっている。この差異は決定的である。いずれかの言い分を他方に論理的に還元することができないからである。

興味深いのは，ストロメイヤーとハンナの議論がハーヴェイやソジャ，ディアーらへの徹底的な批判であった点にもかかわらず，セイヤーが確信犯的かつ挑発的にストロメイヤーとハンナからハーヴェイやソジャ，ディアーに至るまで十把一絡げに「ポストモダニスト」と称していることに対し，ハンナとストロメイヤーは特に感情的に反発していないことである。逆に，このポストモダニストを十把一絡げするという戦略や，ポストモダニズムの哲学的議論を揶揄する論調に対して猛反発したのは，奇しくも，セイヤー同様ストロメイヤーとハンナの観念論的傾向を批判したはずのバーネットであった（Barnett 1993b）。Sayer（1993a: 341）の付記には，セイヤーとの議論に応じたストロメイヤーに対する謝辞が記されているが，バーネットへの返答においては，全く逆に，議論そのものが成り立たないことを嘆いている（Sayer 1993b）。

既に見たように，脱構築や「表象の危機」の問題が重要な論点であり，1980 年代後半の人文地理学におけるポストモダンの議論がこの点において全く不十分だったという認識においてハンナとストロメイヤー，バーネットの双方は共通している[28]。そして，言語が本質的に抱える表象の不確実性やグランド・セオリー批判に関しては，セイヤーも，部分的には同調している。にもかかわらず，ハンナとストロメイヤー，バーネットの間で，セイヤーのコメントに対する感情温度に大きな差が生じた。このことは，論争の中で実際に「語られた」ことと，論争自体が持つダイナミズムとの間のずれを示しているといえるだろう。

以上のように論争が展開したことによって，ポストモダニズムをめぐる議論において懐疑論的ポストモダニズムの立場と批判的実在論の立場との対峙という新たな構図が，よりくっきりと浮かび上がってきたと言える。*AAAG* 誌上でのカリーとハンナ・ストロメイヤーの対立も，このような構図と重ね合わせられることによって，カリーとプレッドとの間の亀裂以上に興味深い知的課題として意味づけられることになったのである。次章では，論争の後―1990 年代後半―の研究動向にも触れつつ，この点を中心に二つの論争の意義を改めて整理したい。

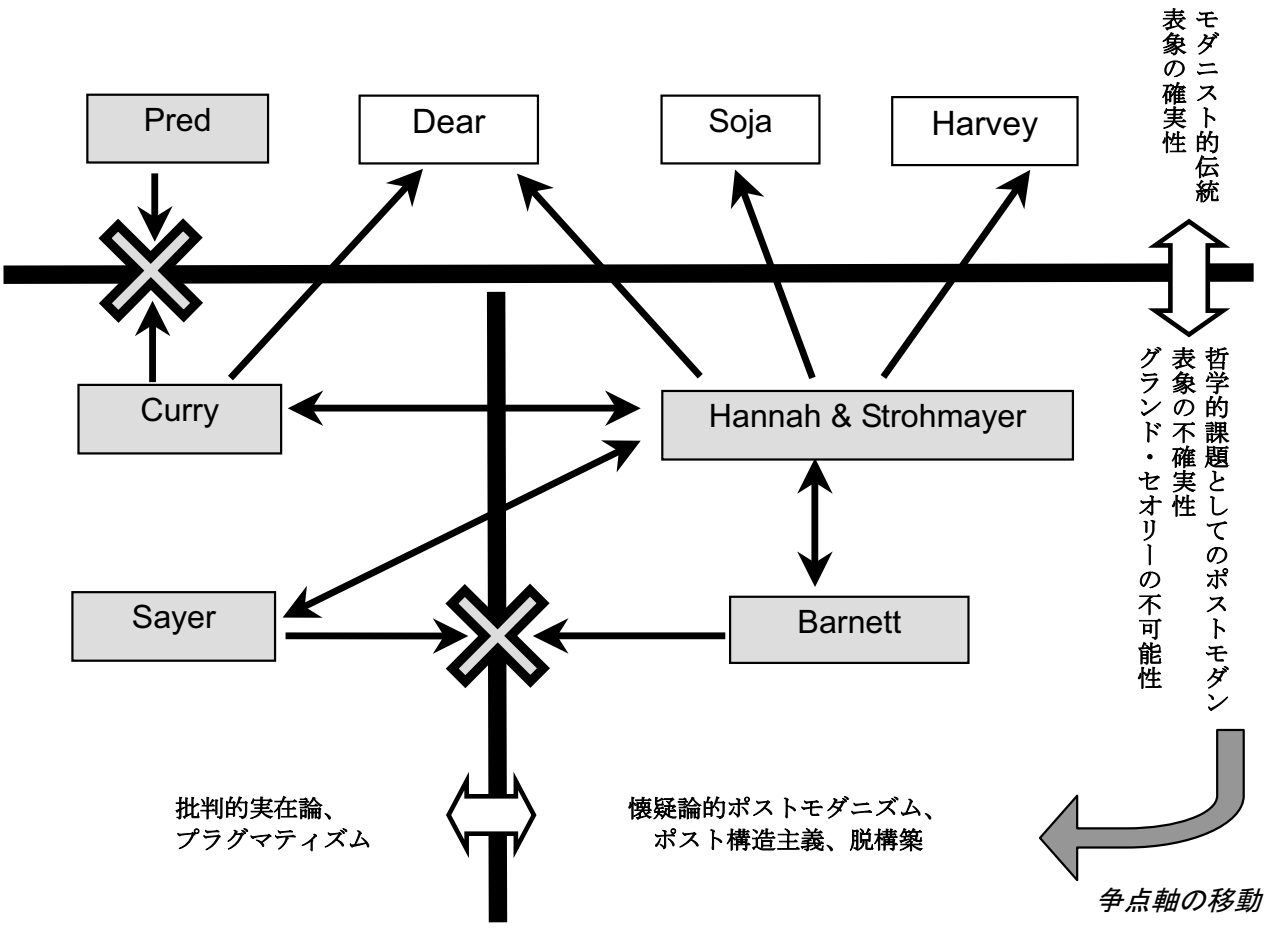
Ⅳ　論争の構図とその後の展開

(1) メタレベルから見た論争の構図

上に見てきた論争から，とりあえず第 1 図のような関係図を得ることができる。

ここまでは論争に寄稿されたテクストの内容に沿って，論争の顛末を検討してきたわけだが，このような形で実際に図化してみると，二つのことが明らかになる。一つは図の上に位置するディアー，ハーヴェイ，ソジャらの立場は，もはや議論の場の中心ではないということである。これは，加藤（1999: 166）が指摘するように，ポストモダンを対象化して捉えようとする議論に対して，「態度としてのポストモダン」を再評価しなおそうという流れが台頭してきたことと連動しているといえる。

しかしより重要なのは二番目の点である。ハーヴェイやソジャのモダニスト的態度が明らかになったことを始めとして，ポストモダンの議論が「態度としてのポストモダン」の再評価へと推移した要因は，加藤（1999: 179-180）が指摘したような「フェミニストを中心とした批判理論」などを中心に，「対象としてのポストモダン」の論陣に対する批判が登場したからだけではない。紹介してきた論争に見られるように，むしろ，カリーやセイヤーのような批判的実在論に近い論者が，ハーヴェイやソジャとは全く異なる立場から，よりインパクトのあるポストモダニズム批判を提供した点こそが重要である。つまり，「態度としてのポストモダン」の立場において，もはや，表象の確実性の上に安座してポストモダンを観察対象，抽象的思弁，言葉遊びなどとみなす「対象としてのポストモダン」の立場よりも，「表象の不確実性」や「グランド・セオリーの不可能性」などの考えを共有する批判的実在論こそが理論的オルタナティブとしてより重要であると認識されるようになったのである。こうして「対象としてのポストモダン／態度としてのポストモダン」の区別から，「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」の区別が



第 1 図　ポストモダニズムをめぐる一連の論争の見取り図

一方向の矢印は、一方的な批判的言及、双方向の矢印は生産的な論争、×印は感情的対立に終わった論争を示す。網掛け太字の論者は論争の当事者であり、白の論者は本稿で検討した論争において一方的に批判された論者を示す。

Figure 1. ‘Guide map’ of the debates on postmodernism in the Anglophone geographical journals.

より重要な議論の焦点になったのである。

繰り返すが，セイヤーやカリーは，表象が不確実であることを全面的に承認する点で，「表象の危機」のパラドクスを重要な問題と捉えるバーネットやハンナ・ストロメイヤーらと共通する。したがって「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」という構図の前面化は，表象の確実性や経験的実在論，素朴実在論に依拠した理論的言説がもはや従来のようにナイーブに支持しえないという認識が，さまざまな系統地理学の枠を越えて人文地理学者の間に浸透していく過程としても理解できる。

だが同時に，この「表象の不確実性」を「相対的には確実なもの」として捉える批判的実在論の立場と，あくまで「確実性の保証の不可能性」として受け止めるハンナ・ストロメイヤーのような懐疑論的ポストモダニズムの立場の間には，当然決定的な差異がある。この差異は観念的，理論的な差異であるだけでなく，同時に，実践的な差異，現実的な亀裂でもある。なぜなら，既に検討したように，それぞれの立場は論理的に両立し得ないのみならず，どちらの立場からも，どちらか一方の立場をとるべきであると考えうる理由が理論的には導かれえないからである。ハンナ・ストロメイヤーが一方を，セイヤーが他方を選択する根拠は，ハンナ・ストロメイヤーにしてみれば「あらゆる解釈の営為に先立つ感性」（Strohmayer and Hannah 1992: 53），セイヤーにしてみれば「間主観的」に成立している「実践的な妥当性」（Sayer 1993a: 325, 330）によっている。しかし，両者とも自ら根拠とするそれらの語が一体何を意味するのかを，自らの理論的立場からそれ以上説明できない。

この点に関して，カリーはより自覚的であった。なぜなら，カリーは，間主観的に成立している妥当性規準に訴えたセイヤーと違い，自らの理論的立場を正当化する概念を積極的に提示していないからである。むしろカリーは，「それ以上説明できない」という事態を表現した概念として，ウィトゲンシュタインの「生活の形式」や「言語ゲーム」などに注目する（Curry 1989）。とはいえ，カリーの立場もセイヤーと同じ危険性を孕んでいる点に変わりはない。カリーは一方で後期ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の概念に言及しつつ，他方では「表象は実践レベルでは，相対的に確実に機能している」と述べていた。このとき，本来は究極の説明原理の不可能性を示唆するための概念装置だった「言語ゲーム」が，表象の規則性が相対的，間主観的に保証されている一種の言語共同体を示唆し，それが表象の相対的な確実性を支える究極の説明原理に転じてしまう危険性が潜んでしまう（例えば Curry 1992: 311）。

この危険性は，ある意味でハンナ・ストロメイヤーが「表象の危機」の問題を認識論的に徹底させた立場から指摘することによって浮き彫りにされたわけだが，逆にカリーが指摘したとおり，ハンナ・ストロメイヤーが表象の相対的確実性を徹底して認識論的に否定した代償として，ロマン主義的ニヒリズムへ傾斜してしまったことは，後の論争から明らかである。結局，セイヤーやカリーにしてもハンナ・ストロメイヤーにしても，それぞれの盲点が明らかになるのは，お互い相容れないもの同士が出会い，相互に批判／否定されることによってであり，現実はまさにその通りになったと言える。

さらにカリーとプレッド，バーネットとセイヤーの場合，この批判／否定はより熾烈なものであった。前者のケースにおけるプレッドの感情的な反応はともかくとして，後者の場合，ハンナ・ストロメイヤーの過剰な認識論的懐疑主義を批判するという意味で，バーネットとセイヤーはそれほど立場が異ならなかったにもかかわらず，両者のやりとりが生産的な議論に至らなかった点は興味深い。このことは，論争を通じたコミュニケーションが，論争の内部で問題にされているテーマとは別次元で，独自のダイナミズムを伴って進行するものであるということをよく示している。論争が生産的なものになるかどうかということと，論争の関与者の主張内容は全く別次元の問題である。論争を実りあるものとするためには，関与者が相互に協力して，相容れない論敵の主張の中に共有可能な要素と共有できない要素を分別していくことが必要であるという，ある意味で自明のことが，図らずもセイヤーの論争への介在を通じて，きわめて明確に表れたように思われる。

以上のように，二つの論争を通じて「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」という対立軸が，ポストモダニズムをめぐる理論的諸研究の中に，新たな理論的課題として現れてきたわけである。また

理論的な対立軸とは全く別に，論争それ自体のダイナミズムによっても対立は生じるということも，二つの論争を通じて明らかになった。そして，このような事態は，同時代の人文社会科学一般をめぐる動向とも並行するものである。次節では，論争に関与した人物を中心に，この新たな課題をめぐって人文地理学の中でいかなる理論的試みがなされつつあるのかを，社会科学一般をめぐるより広いコンテクストにも位置付けつつ，紙幅の許す限りでフォローしておきたい。

(2) その後の展開

既に指摘したように，論争の意義の一つは，「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」という区別が，ポストモダニズムという語をめぐって展開される 1990 年代の理論的研究にとって重要な指標として認識されるようになったことである。もう一点は，これらの論争が，人文地理学的なもの，空間的なものをめぐる論争では全くなかったという点である。ここまで見てきたように，これらの論争は，表象としての「景観」，「都市」，「スケール」などをめぐる論争などではなく，まさに「表象」それ自体を争点とする論争であった。その意味で，これらの論争は人文地理学に固有の問題をめぐる論争というよりは，まさに人文地理学を根底から覆しかねないまで徹底的に，学そのものを問う論争であったといえる[29]。

実際に，1990 年代の後半以降，学としての人文地理学の構成そのものを問題化する論争が増えるとともに，学問という枠組み以前の倫理性が疑われるような中傷が一部の人文地理学者に寄せられ，それらの「事件」自体が論文という形で問題にされるという事態まで生じてきた（Valentine 1998; Dear 2001 など）。このように論争が論争の枠を超えて暴走するという事態を懸念し，批評の自己破壊につながると嘆く声も方々から表明されている（Hannah and Strohmayer 2001: 381 参照）。このような，従来の学問的価値観からすればスキャンダラスとしか言いようのない事態は，人文地理学に限らず，他の分野においても形こそ違え，ほぼ同時代的に生じていた。その一例として，いわゆるソーカル事件（ソーシャル・テクスト事件 *Social Text* affair）を挙げることができる[30]。先に紹介した二つの論争も，このような人文社会科学全体を取り巻く状況と人文地理学の動向とが連動していくきっかけの一つだったと言える[31]。では，この二つの論争の当事者たちは，無益な論争の暴走として非難すらされている事態を招いた例の対立―懐疑論的ポストモダニズムと批判的実在論―に対して，その後どのようなスタンスを取っていたのだろうか。論争に関与した論者，とりわけセイヤー，ハンナとストロメイヤー，カリーを中心に，論争以降の理論的研究の流れを追いながら，論争の意義を振り返ることにしたい。

セイヤーがバスカーの批判的実在論の影響下で『社会科学の方法』を最初に著したのは 1984 年であり，1992 年にはその改訂版が出版されている（Sayer1984, 1992）。このことは，社会科学，ことに人文地理学にとって批判的実在論に関するセイヤーの議論がいかに息の長いものであったかを物語っていると同時に，この間のセイヤーのポジションが相対的に変化していなかったことを示している。その後，2000 年にセイヤーは 1990 年代の論考を中心として批判的実在論をめぐる新たな本を出版した（Sayer 2000）。この著書で，セイヤーは批判的実在論の理論的根拠そのものを依然として擁護しており，必ずしも懐疑論的ポストモダニズムに対して譲歩しているわけではないが，ハンナ・ストロメイヤーとバーネットとの論争に展開した論考も収められている。また，ソーカル事件に対するセイヤーの見解も表明されている[32]。

このように見ると，ハンナ・ストロメイヤーとバーネットとの論争を始めとして，1990 年代を通じて人文社会科学で生じた様々な出来事が，批判的実在論者としてのセイヤーに何らかの知的刺激を与えたということが察して取れる。実際に，ポストモダニズムと批判的実在論についてまとめた章がそれまでの著書と異なるもっとも目立った新しい成果であるが，その冒頭で，「これまでポストモダニストと接点を持ってこなかったことは批判的実在論にとっての不幸であった」とセイヤーは語っている。これは，「表象の確実性」や「グランド・セオリーへの傾倒」をメルクマールとするモダニズムの伝統が，懐疑論的ポストモダニストと批判的実在論両者にとっての共通の論敵であったことを改めて示している。さらに導入部分からも，ポストモダニズムの影響を受け

て科学的知識をラディカルに拒絶する立場に対抗する形で，批判的実在論を再構成する必要をセイヤーが感じていたことが伝わってくる（ibid: 2-3）。

一方ハンナとストロメイヤーは，近年の人文地理学内で顕著になった知的コミュニケーションの混乱と暴走を顧みつつ，論争における説得の技法やレトリックにまつわる論考を著している（Hannah and Strohmayer 1995, 2001）。先の論争の見取り図からも分かるように，ハンナとストロメイヤーは，主張の内容やラディカルさとは裏腹に，多くの論敵との間に，共有可能な知と相互の主張の相違点を明確にするような，生産的なコミュニケーションを展開していた。不毛な誹謗中傷も含めて学内のコミュニケーションが混乱する中で，その混乱に悪のりするのでもなく諦観に終始するのでもなく，論争それ自体をも冷静な視点から自己言及的に考察の対象とすることで，あくまで生産的な知的営みのあり方を探究し続けようとする彼らの姿勢は評価に値する。彼らは，ポストモダニズムの挑戦は「知の可能性それ自体でもなく，人間の主体性でもなく，外部のリアリティでもなく，われわれがある仮定に依拠せざるを得ないがゆえにそれは正当な物でなくてはならないという観念にこそ向けられている」（Hannah and Strohmayer 1995: 340）と述べている。ここからは，実在論者も含めた一連の論争を経て，彼らの問いの立て方がより洗練されていることが窺える。また，Hannah and Strohamayer（2001）では，二人の師であったグールド Gould, P.の著書を題材として，論争において不要なコミュニケーションの断絶を生じさせるレトリックが詳細に検討されているが，その経験的な論証のスタイルや，冒頭で引用されているスローターダイク Sloeterdijk, P.の言葉 [33]からも，かつての論争におけるシニカルなまでの認識論的懐疑主義を軟化させ，実在論的アプローチに対しても門戸を開いていこうという姿勢が窺える。

このような立場の変遷がより顕著なのは，ストロメイヤーよりもハンナの方で，彼は 1999 年に単独で，懐疑主義的立場を貫きつつも，そこから批判的実在論，特にバスカーの論考を再検討するという作業を行っている（Hannah 1999）。『懐疑論的実在論』という表題から考えても，セイヤーとの論争がその後のハンナの理論的構想に大きな影響を与えたことが読み取れる。同時に，1993 年の論争でハンナ・ストロメイヤーとセイヤーが，ポストモダニズムと批判的実在論の間に共通性があることを何度も強調していたこと，両者の間に決定的な立場の違いがあるにもかかわらず生産的・建設的なコミュニケーションが成立したことを考えれば，ハンナが懐疑論的ポストモダニズムと批判的実在論の折衷から，新たな方向性を模索していくことができると考えていたことが読み取れるだろう。ただし，セイヤーが批判的実在論を擁護する姿勢を崩していないのと同様に，ハンナも懐疑論的スタンスを崩しているわけではなく，この論考においても，バスカーの批判的実在論は，その根拠たる部分に一種の懐疑主義を導入することで，内的により一貫した理論となるというのが主要な論点となっている。

時期は前後するものの，カリーは 1996 年の著書で，ポストモダニズムと批判的実在論の邂逅の先にある空間論を予見させるような議論を展開している（Curry 1996）。彼は冒頭で次のように述べている。

> ふつうの地理学者なら，…地理学の仕事をめぐるもう一つ，いや二つのパラドクスがあることに何の異論もないだろう。一つはこれ。1980 年代以降になって私たちは，テクストとしてのこれこれ, テクストとしてのそれそれ，テクストとしての景観やら自然やら都市について，という類の仕事の嵐に見舞われてきた。でもテクストとしてのテクストに関する仕事には全くお目にかかることがなかった。さらに，地理学者がそういう仕事にせっせと取り組んでいたころ，ありとあらゆるものの地理学を研究していたころ，書かれたものに関しての地理学，要するにテクストの地理学を考えていた人は誰一人としていなかった。書かれたものについてのこうした逆説的な特徴は，いまだにほとんど目を向けられていないし，体系的な考察などというものは疑いなく存在していない。
> …そして以下で論じるように，書かれたものの理解を困難にしているのは，まさに書かれたものの存在そのものなのである（ibid: ix-x）。

カリーは人文地理学者のテクストを実に素朴にテクストとしてのテクストとしてみなし，自らのテクストも含めたさまざまな人文地理学者のテクストを，本の執筆，印刷，流通，売買，批評などを含めた現代思想，社会科学における諸実践が織り成す関係性の見取り図の中に描くことで，人文地理学のテクストの「ポジショナリティ」を問おうとする。テクス

トへ関心が集中した点に，「表象の危機」の問題をラディカルに追求した懐疑論的ポストモダニストの批判の影響を見て取ることも出来る。しかし他方で，テクストの存在そのものを問う際に，このような問題設定からつい連想しがちなポスト構造主義ないしポストモダニズムの語彙には言及しないし，ポストモダン的な方法にも訴えない，とカリーは宣言する（ibid: x）。この時，かつて批判したプレッドの皮相なポストモダン的アプローチだけでなく，ハンナ・ストロメイヤー，バーネットらのように表象の危機や脱構築などの問題系をまともに受け止める論者とも差異化が図られている。

カリーが「テクストの地理」と呼ぶのは，テクストが書かれた結果として，知にアプローチする方法や問いの領域そのものの差異，あるいはそのような差異の体系が現実的，実践的に生み出されるプロセスのことである。一度著されたテクストが無数の言語や観念を包容しそれらが相互に関係付けられる「空間 space」を切り開き，その無限の「空間」の支配者，つまり著者性を確立するにもかかわらず，テクストの成立は常に本の出版や印刷，書店での売買，読者，批評などが実践される際の諸状況，つまり「場所 place」に制約され，位置付けられているというパラドクスを，カリーは指摘しているのである[34]。このようなテクスト生産の現実的，実践的側面を，カリーは「テクストの地理」と呼ぶのである。このような着想には，テクスト論が傾斜しがちな認識論や観念的なものに，実在＝現実的なもの the real を対置しようという強い意識が表れている[35]。

近年，スリフト Thrift, N. が非‐表象理論 non-representational theory と称する一連の社会理論群に注目しているのも，このような意識と関係していると思われる。「世界を構成するのは無数の幸福な，あるいは不幸な出会いである」というドゥルーズの格言がさりげなく引用されているが（Thrift 1999: 302），このような出会いのネットワークが，非‐表象理論において，社会のリアリティをイメージさせるものとして提示されている。このような非‐表象理論との関わりで，スリフトはパフォーマティヴィティ（行為遂行性）という概念にも注目するが，フェミニストの立場から人文地理学の実践的な革新を試みてきたローズ（Rose, G.）がスリフトとほぼ時を同じくしてこの概念に注目したのも偶然ではなかろう。ローズは，時空間において行為が遂行されるのではなく，行為が遂行されたところに時空が拓けてくるという認識を示している（Rose 1999: 247-248）。このような認識の背景にも，ナイーブかつポジティブには語り得ないがその存在を無視しえないようなもの，つまり批判的実在論における意味合いでの「現実的なもの」として，空間や時間を捉えようとする意識を見出しうる[36]。

1990 年代の後半に入ってスリフトやローズが新たな社会理論を積極的に提示しようと試みた背景には，やはり，それまでの人文地理学が暗に前提としてきた素朴実在論がハンナ・ストロメイヤーやバーネットらによって死刑を宣告された後，人文地理学の実践を方向付けうる新たな存在論的なバックボーンが必要とされているという認識があると思われる[37]。

以上，論争以降に〈懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論〉というテーマをめぐって登場した新たな研究動向を，論争の関与者を中心としていくつか紹介してきた。大まかな流れとして，現在の英語圏の人文地理学における理論的研究動向は，ポストモダニズムの哲学を背景とした認識論，テクスト中心主義の優位から広い意味での実在論の復権へという流れを見て取ることが出来るが[38]，依然さまざまな取り組みが乱立しており，決定的な解決策が登場したとは言いがたいのが現状である。このような現状についての学説史的な総括は時期尚早であるし，今後の展開を見守るほかはない。いずれにしても，現在の人文地理学において，表象の確実性というモダニズムの大前提が成り立たないことを受け止めた上で，いかにしてわれわれの知的生産の営みが可能なのかということが，理論的・思想的課題となっていることは疑いがない。懐疑論的ポストモダニズム，批判的実在論それぞれの立場は，まさにこのモダニズム以降の課題をめぐって登場した二つの極であったといえるだろう。

Ⅴ　むすび

Curry（1991: 224）は，人文地理学において社会

理論という言葉が使われるとき，それは社会についての理論一般ではなく，端的にマルクス，ウェーバー，セイヤー以外の何ものでもない，と述べている。ここから分かるのは，普段われわれがつい先進的であると考え暗黙の内に規範としがちな英語圏の人文地理学においてさえも，社会理論，ポストモダニズムなど外部から急激に押し寄せてきた知的資源を前に混乱していたのだという事実である。人文地理学における理論的研究で課題になっているのは，これらの知的資源をめぐって錯綜する議論の中から，いかにして新たな知を創造／想像していくことができるかということであろう。それは，「地理学というものは，非常に多様なディシプリンを問題にしうる場を開いていると考えていいのでは」（水内・大城・多木・吉見 1997: 80）という多木の発言を肯定的に受け止めつつ，知的探究の道を歩み続けることでもある。「懐疑論的ポストモダニズム／批判的実在論」というのも，このような知的探究の過程で登場してきた構図の一つである。

カリーや多木の発言，一連の論争などを改めて振り返ると，筆者には，これまで空間の議論とは縁の薄かったウィトゲンシュタインやデリダをはじめとする人文社会科学共通の知的財産を人文地理学者がじかに手習いとしてもよい状況は，英語圏においてもようやく登場したばかりであるように思える（たとえば Thrift and Crang 2000; Stirk 1999; Barnett 1999 など）。本稿で紹介した論争の一部も，人文地理学の制度内で生じたにもかかわらず，それらの知的財産をめぐって，空間や場所や景観など人文地理学に固有のテーマを一度括弧に入れた上で展開されたものであった。その中で，従来の系統地理学的区分では接点のないような異質な研究者同士が出会い，論争という形のコミュニケーションを繰り広げ，そこから新たな知的課題を発見していった。筆者は，このように多様な人文地理学者同士の間で，人文社会科学の実践そのものに関わる論争が成立したという事実にこそ，価値があると考える。実際，一連の論争の後の展開を見ても，論争で得られた知的成果を性急かつ安直に空間の議論へ結びつけるのではなく，論争を通じて得られた教訓を，社会科学全般の知的実践のあり方を反省するためのエネルギーへ転化させていった雰囲気が強いことは，IV 章で確認したとおりである。

本稿で展開してきた類の哲学的，理論的研究のみが，断片化された系統地理学諸分野の間に生産的コミュニケーションをもたらしうると考えるわけではない。しかし，少なくとも，哲学的問題としてのポストモダニズムをめぐる議論が多くの人文地理学者に共有されうる，あるいは共有されていた話題の一つであることは間違いないし，英語圏の人文地理学の混沌とした状況を理解するための鍵となることは確かである。このような理論的研究の混迷は，研究実践や方法の問題という点で経験的研究との間に直接間接の関係を有しながら，収拾することなく現在進行形で継続している。その意味で，本稿で素描した見取り図は，理論的，思弁的な研究であろうと経験的，実証的な研究であろうと，われわれが海外へ向けて成果を発信していく際に，不完全ながらも携えておくべき，そして日々更新していくべき「ガイドマップ」のような物だと考えられはしないだろうか。

翻って日本の人文地理学を顧みると，本稿が展開してきたような哲学的議論は，明に暗に回避されている傾向にあるように思われる。このような傾向は，日本において近年の英語圏人文地理学における理論的哲学的研究の動向をフォローした教科書が，翻訳を除いてほぼ皆無であるという事実にも現れている。本論でもバーネットの見解として紹介したが，真理を支える絶対的基盤が存在するという認識が幻想であったことがはっきりしたからこそ，われわれが生産する知識の妥当性を判断する際には，実践的なレベルで一層の慎重さが求められる。その意味で，これまで日本の人文地理学で培われてきた緻密な経験的調査研究に対する感性が全く無意味になる心配はない。しかし，それが有意義であり続けるためには，経験的調査研究が，思弁的，認識論的なレベルで経験的研究の可能性をラディカルに考察する営みとの緊張関係に常にさらされ，鍛え上げられたものでなければならないと筆者は考える。

日本の人文地理学では，人文地理学や社会科学の原理的可能性を探求する哲学的，思想的議論は，いまだ研究の面でも教育の面でも不十分である。今後充実した議論を積み重ねていくためには当面個々の研究者の力量に頼らざるを得ない部分が大きいと思

われる。このような状況を一挙に改善するというのは，本稿のみが負うべき課題としてはあまりに過大であるが，せめて「知の経済」という意味で，本稿が今後のより活発な議論の足場として少しでも貢献できるものであることを願いたい。

注

1) 筆者の見方では，このような流れの端緒となった論考は Dear（1986），Dear（1988）などである。
2) これは，やや乱暴に要約すれば，「ハーヴェイ・ソジャ／ドイチェ・マッセイ」という対立軸でもある。なお，加藤が用いたこの区別自体は，直接間接に，大城（1996），大城・丹羽・荒山・長尾（1993），Cloke, Philo and Sadler（1991）などの文献に依拠している。
3) ここでいう懐疑論的ポストモダニズムとは，ポスト構造主義哲学などを背景に，表象の確実性に対する懐疑を認識論的に徹底させる思想的立場のことである。批判的実在論は，科学的実在論，などとも呼ばれるが，近年の人文地理学では多くの場合，単に実在論 realism と呼ばれる（本稿では経験的／素朴実在論と批判的実在論との差異を重視するため，「批判的実在論」という語を用いる）。批判的実在論はもともとは科学哲学の一潮流であったが，とりわけ社会科学に大きな影響を及ぼしたのは，英国の科学論者バスカー Bhaskar, R.の超越論的実在論に関する議論である。
4) ［ ］内は引用者による挿入（これ以降も同様）。
5) 本稿の主旨は，論争に関与した特定の論者の立場を擁護することではない。以下で紹介する論争に関係した議論の中には，お互いに論敵のテクストの読解，理解の仕方が果たして適切かどうかという点について疑問符のつくものも含まれるが，本稿では紙幅の都合上，その点の追求は最小限にとどめておく。
6) 同様に，従来の論文の書式からすると型破りなスタイルは，オルションやライヒェルトも採用しており，いずれも Curry（1991）の批判対象となっている。
7) 筆者は Pred（1988）を直接確認できなかったが，これと同じ文章は，Pred（1990: 8）に再掲されている。
8) この姿勢は，特に，Pred（1990: xv-xvi）において顕著である。
9) 彼が意図的に詩的書法を採用していたことは，それを自ら「テクスト戦略」（Pred 1990: xv, 1992: 307）と呼んでいることから明らかである。
10) Curry（1991: 219）。この批判は，ポストモダニズムの弊害である「ファッショナブル・ナンセンス」を批判した，ソーカルとブリクモンの見解と見事に整合する。「難しさが本物ならば，そのテーマについてより深い知識を身につけるためのはっきりとした道が―長い道のりかもしれないが―用意されている。これに対して，ある種の難解な言説は，それを理解するために読者に思考の質的な跳躍や天啓のような体験を要求しているという印象を与える」（ソーカル・ブリクモン 2000: 248）。
11) 「［両義性を持った曖昧なテクストは］，読み方に応じて，正しいがかなり当たり前の主張か，過激だが明らかに間違った主張かのいずれかになる。そして，多くの場合，このような曖昧さは著者が意図して持ち込んだものだと考えざるをえない。実際，こういう書き方にしておくと学問的な論争の際大いに有利である。過激な解釈の方は，比較的経験の浅い聴衆や読者の気をひくのに役立つ」（ソーカル・ブリクモン 2000: 252）。
12) このような著者，あるいは言語使用者の特権性がまやかしであることを明らかにしたのが，他でもない，（プレッド自身が参照する）ウィトゲンシュタインやベンヤミンのような論者である。Curry（1991: 223）。
13) カリーは，当時のディアーやプレッドによるウィトゲンシュタインやニーチェへの言及も「共同体，親密性，そして帝国を構築する」ためのもので，そこではウィトゲンシュタインやニーチェらのテクストが持つモダニズムに対する批判的意義が損なわれていると指摘する（Curry 1991: 211）。
14) カリーが，プレッドの反論に対してなお「自説を再び繰り返した」（ジョンストン 1999: 183）のはこのためである。
15) ここで「表象の危機」の問題というのは，言語が使用者のコントロールを超えることを認識した途端に，あらゆる表象が不確実なものである可能性を否定できなくなる問題のことである。カリーは，Dear（1988）にしたがって，ポストモダニズムを，時代としてのポストモダニズム，スタイルとしてのポストモダニズム，方法としてのポストモダニズムの三つに区分している。「表象の危機」の問題は三つ目に属する。しかしカリーはこのディアーの区分自体を特に批判してはいない。
16) ここで俎上に乗せられているのはジェイムソンのソシュール批判である。
17) ここで第三のタイプとして具体的に取り上げられている論者はアドルノである。
18) ここで彼らが問題視するのは，一方で表象の危機の問題を認める身振りを見せながら，他方では表象の確実性の上に構築される批判的社会科学の可能性そのものを疑おうとしない態度である。
19) ただし Curry（1991）に関しては，同化の戦略と見なされているものの以下のように肯定的に評価されている。「注意の目が地理学にとっての意義への関心よりもポストモダニズムのテクストそれ自体にまず向けられる場合，…より実り多い形で問題の複雑な面に絡んでいくことになるだろう」（Strohmayer and Hannah 1992: 52）。

20) 「ポストモダンの挑戦」に括弧が付されているのは，Dear（1988）のタイトルを皮肉混じりに流用したものと思われる。

21) ディアーやカリーの場合，この哲学的問いとしてのポストモダニズムは「方法としてのポストモダン」に区分されていた。

22) 構造化理論を批判した Hannah and Strohmayer（1991）でも同様の態度がとられている。

23) バーネットはこのような彼らの態度をロマン主義への回帰であると非難する Barnett（1993a: 355）。

24) 彼はこの問題点を，ポストモダニズムを揶揄するかのように「ポーモーのとんぼ返り」 Pomo flip と呼んでいる（Sayer 1993a: 321）。

25) 特に，ドイチェのハーヴェイ批判をあげつらい，以下のような批判を行っている。「ドイチェはハーヴェイの『ポストモダニティの条件』への批判において，リアリティは発見されるものではなく構築されるのだと主張している。だが，私たちはハーヴェイの本が彼女に構築されたと考えるべきであろうか。…彼女に利用可能な社会的／言説的に構築された概念を通じて彼女に発見されるべく，本自体は現にそこにあったのではないのか」（ibid: 331）。

26) われわれは日常的実践においても科学的実践においても，このような意味での相対性，妥当性に反省的懐疑を向けていないとセイヤーは主張する（ibid: 329）。

27) 最初の「」内は Sayer（1993a: 327），二番目以降は Sayer（1993a: 324）からのハンナとストロメイヤーによる引用である。

28) 「［ストロメイヤーとハンナは］言葉とリアリティは確実な内に結合されえないと主張する（これは，それらが区別したり分離したりできる実体であることを必然的に含意してしまっているような言い方である）。そして，われわれが世界について何でも知ったり言ったりできると本気で考えているような，この期に及んでなお頭の悪い頑固な人々にとっては過酷な結論を提示していく」（Barnett 1993a: 349-350）。これは，ストロメイヤーとハンナへの批判であると同時に，モダニスト的伝統や素朴実在論への皮肉でもある。

29) この点において特にラディカルだったのはハンナとストロメイヤーであろう。

30) ソーカル（Sokal, A.）は物理学者であり，カルチュラル・スタディーズ系の学術誌である *Social Text* 誌に，わざとでたらめな内容の論文を投稿し，それが掲載された直後に事実を暴露した。その後ソーカルと一部の人文社会科学者に生じた対立は，哲学的な背景に由来する論争と言うよりも，単なる感情的対立であった感は否めない。

31) たとえば，ソーカル事件に便乗したいかにも「ポストモダン的」なテクストにおいて，ストロメイヤーとセイヤーのやり取りが引き合いに出されている（Dixon and Jones III 1998: 251）。 また，彼女らは，ポストモダニズムやポスト構造主義に影響を受けた議論を揶揄するかのようなタイトルのエッセイも書いている。（Dixon and Jones III 1996: 767-779）。 ちなみに著者の一人ジョーンズは，空間分析の研究者として知られていた人物である。

32) ここにおいて，ソーカルが暴いた人文社会科学にはびこる「いんちき」のみならず，それを暴く際のソーカルの不作法な態度も同様に拒否する，という姿勢が表明されている（Sayer 2000: 8）。

33) 「論敵がほとんど聞く耳を持たないゆえに，イデオロギー批判の最初には驚き―そしてこの驚きは直ちにリアリズムの感覚を呼び覚ますことになる―もが存在する」（Hannah and Strohmayer 2001: 381 における，スローターダイク 1996 の引用）。

34) 本稿の事例に即して敷衍すれば，書かれた内容とは無関係に雑誌で論争として特集されたこと自体が持つ舞台効果や，そのような論争が続けざまに *Antipode* 誌でも特集されたこと，またそれぞれの論争に同一の人物が関わっていたことなどは，論争において書かれていることそれ自体とは無関係なはずである。しかし，これらの事実が理屈の上では書かれた内容と無縁であるからといって，われわれは決してそれらを実際に無視しているわけではない。一連の論争においては，異なる考え方が単に理屈の上で対立しているのでなく，それらの対立を具現化したり強調したりする物質的，制度的，実践的側面が絡んでいる。

35) この他にも，ここで紹介したような意味合いで「場所」という言葉を意味づけている論考として Sack（1997），Curry（2000）などがある。ちなみに，Sack（1997: 1-26, 264）では，セイヤー同様ラディカルな相対主義を批判するとともに，自らが批判的実在論者であると述べられている。

36) とはいえ，このような意味合いにおいて捉えられるものを場所，空間，あるいはその他の語で呼ぶかは，論者によってまちまちである。

37) 例えば Thrift（1993）が，人文地理学におけるギデンズ批判（Hannah and Strohmayer 1991 など）に抗うかのように，ギデンズを擁護し始めたのも，このような背景からであろう。

38) この点に関して，やはりソーカル事件が人文社会科学者集団に与えた社会的影響は無視できない。

文献

Barnett, C. 1993a. Peddling postmodernism. *Antipode* 25: 345-358.

Barnett, C. 1993b. Stuck in the post: an unsympathetic critique of Andrew Sayer's "Postmodernist thought in geography: a realist view". *Antipode* 25: 365-368.

Barnett, C. 1999. Deconstructing context: exposing Derrida. *Transactions of the Institute of British Geographers N. S.* 24: 277-293.

Cloke, P, Philo, C. and SadlerD. eds. 1991 *Approaching human geography: an introduction to contemporary theoretical debates*. London: P. Chapman.

Curry, M. R. 1989. Forms of life and geographical method. *Geographical Review* 79: 280-296.

Curry, M. R. 1991. Postmodernism, language, and the strains of modernism. *Annals of the Association of American Geographres* 81: 210-228.

Curry, M. R. 1992. Reply. *Annals of the Association of American Geographres* 82: 310-312.

Curry, M. R. 1996. *The work in the world: geographical practice and the written word*. Minneapolis: University of Minnesots Press.

Curry, M. R. 2000. Wittgenstein and the fabric of everyday life. In *Thinking space*. eds. N. J. Thrift and M. Crang. 89-113. London: Routledge.

Dear , M. J. 1986. Postmodernism and planning. *Environment and Planning D: Society and Space* 4: 367-384.

Dear , M. J. 1988. The postmodern challenge: reconstructing human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers N. S.* 13: 262-274.

Dear, M. 2001. The politics of geography: hate mail, rabid referees, and culture wars. *Political Geography* 20: 1-12.

Dixon, D. P. and Jones III, J. P. 1996. For a supercalifragilisticexpialidocious scientific geography. *Annals of the Association of American Geographers* 86: 767-779.

Dixon, D. P. and Jones III, J. P. 1998. My dinner with Derrida: or spatial analysis and poststructuralism do lunch. *Environment and planning A* 30: 247-260.

Hannah, G. M. 1999. Skeptical realism: from eithr/or to both-and. *Environment and Planning D: Society and Space* 17: 17-34.

Hannah, M. and Strohmayer, U. 1991. Ornamentalism: geography and the labor of language in structuration theory. *Environment and Planning D: Society and Space* 9: 309-327.

Hannah, M. and Strohmayer, U. 1992. Postmodernism (s)trained. *Annals of the Association of American Geographres* 82: 308-310.

Hannah, M. and Strohmayer, U. 1993. Obsolescence of labor: reference and finitude in Barnett and Sayer. *Antipode* 25: 359-364.

Hannah, M. and Strohmayer, U. 1995. The artifice of conviction, or, an internal geography of responsibility. *Gegraphical Analysis* 27: 339-359.

Hannah, G. M. and Strohmayer, U. 2001. Anatomy of debate in human geography. *Political Geography* 20: 381-404.

ジョンストン, R. J. 著, 立岡裕士訳 1999. 『現代地理学の潮流 ： 戦後の米・英人文地理学説史（下)』地人書房.

加藤政洋 1999. ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市へのまなざし」―ハーヴェイとソジャの批判的検討を通して. 人文地理 51: 164-182.

水内俊雄 1992. 人文地理学は過激に惑う. Libellus 5: 2-13.

水内俊雄・大城直樹・多木浩二・吉見俊哉 1997. 「新しい地理学」をめぐって―地図の解体, 空間のマッピング. 10+1 Ten Plus One 11: 64-84.

野澤秀樹 1995. 社会理論と地理学―構造化理論の批判的検討. 人間科学 1: 157-181.

大城直樹 1996. 文化=社会地理学とフーコー―方法論的現状についての素描. 人間科学 2: 125-141.

大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉 1993. 1980 年代後半の人文地理学に見られるいくつかの傾向―イギリスの最近の教科書から. 地理科学 48: 91-103.

Pred, A. 1988. Lost words as reflections of lost worlds. In *A ground for common search*. eds. R. Golledge, H. Coucelis, and P. Gould. 138-147. Goleta: Santa Barbara Geographical Press.

Pred, A. 1990. *Lost words and lost worlds: modernity and the language of everyday life in late nineteenth-century Stockholm*. Cambridge: Cambridge University Press.

Pred, A. 1992. Straw men build straw house? *Annals of the Association of American Geographers* 82: 305-308.

Rose, G. 1999. Performing space. In *Human Geography Today* eds. D. Massey, J. Allen and P. Sarre, 247-259. Cambridge: Polity Press.

Sack, R. D. 1997. *Homo geographicus: a framework for action, awareness, and moral concern*. Baltimore, MD, and London: The Johns Hopkins University Press.

Sayer, A. 1984. *Method in social science: a realist approach*. London: Hutchinson.

Sayer, A. 1992. *Method in social science: a realist approach (2nd ed)*. London: Routledg.

Sayer, A. 1993. Postmodernist thought in geography: a realist view. *Antipode* 25: 320-344.

Sayer, A. 1993. A reply to Clive Barnett. *Antipode* 25: 369.

Sayer, A. 2000. *Realism and social science.* London: Sage .

スローターダイク, P. 著, 高田珠樹訳 1996. 『シニカル理性批判』ミネルヴァ書房.

ソーカル, A.・ブリクモン, J. 著, 田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹訳 2000. 『「知」の欺瞞―ポストモダン思想にお

ける科学の濫用』岩波書店.

Strohmayer, U. and Hannah, M. 1992. Domesticating postmodernism. *Antipode* 24: 29-55.

Stirk, N. 1999. Wittgenstein and social practices. *Environment and Planning D: Society and Space* 17: 35-50.

Thrift, N. 1993. The arts of the living, the beauty of the dead: anxieties of being in the work of Anthony Giddens. *Progress in Human Geography* 17: 111-121.

Thrift, N. 1999. Steps to an ecology of place. In *Human Geography Today* eds. D. Massey, J. Allen and P. Sarre, 295-322. Cambridge: Polity Press.

Thrift, N. J. and Crang, M. eds. 2000. *Thinking space*. London: Routledge.

Valentine, G. 1998. "Sticks and stones may break my bones": personal geography of harassment. *Antipode* 30: 305-332.

付記

本稿の執筆に際し，平成 13・14 年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費 3416）の一部を使用した。